昭和六年三月二十八日發行（通巻八号）

會報

第二年第三号

春を迎へる言葉

先月の中旬一週間程、お暇を貰って赤倉から字奈月へ廻って来た。道連れは昔の山を思ひ出させて呉れる山の仲間ではあるけれどやっぱりスキーはいゝなあ！ッタ！くそう思った。ゲレンデスキーは二月に限るねえ。混まないって優遇されて。来年は誰か一処に行かないかあ。

もうスキーの話でもないかも知れないねえ。春だもの。然も何んて素晴らしい春なんだ。三組の結婚式が一時に挙げられるなんて、

九郎チャンにとっては何年越しか、もう数へ切れない程永い間のリーベが実を結ぶんだから何んと云ってお祝ひしていゝやう。謙ちゃんの場合にはそれ、、そ文字通りに恋人以上の素晴らしい花嫁さんだもの。猶嬉しいねえ。それに我が親愛なるコンちゃんと永久の日にも断然アクチビチーとチャツルネスのエッセンスの様なアインパールさんだしその上花婿殿お自身の口から「気に入ってしまふしと仰言ったんだから、コイツは確かにスプレンデッドだ。

御めでとう皆様！

それだけじゃないんだ。我が金田一郎兄にも目下物色中とか、きっとトテシャンが来るに定まってあるんだ。

イヨ〳〵素敵な春だ。

俺も東京の花嫁が見度いなあ、

われる様な大声で皆にお目出度うがドナッテやりたいなあ。

一々面會が出来ないから此の紙面を借りて御祝言申し上げる事右の如くに御座候だ。

（一九三六、三、二三、英助）

めぐりあひ

「上へ参りまあす」

エレベーターボーイは鋼アに手をかけた。途端にあはたゞしく駆けこんで来た一人の男。黒の鼈甲縁の眼鏡をかけ、麗色のオーヴアの小腋には黒革のポートフォリオをかゝえて居る。丈が高い。奥の羽目板を背にして私の左手に立った。「見た様な男だな」と思った。エレヴエーターは悠々と上昇を始めた。私はぬすみいる様に其男の横顔を

現った。曲ってゐるー、南部の鮭だ。よし、違ひない！ソッと腋の下を突ついてみた。

「やっぱりさうだったのね。どうも似てると思ったんだけれど。まだ大阪に居たの？」

「正しく「九郎ちゃん」である。

「誰かと思ったぜ、今夜歸る。一寸六階の店まで来たし

「さうを。僕、日本堂素までできたの。五階で待ってますから」

二月十七日の午後二時頃、大阪ビルのエレベーター内の出来事である。エレベーターは御承知の狭い箱である。尤も白木屋の「小倉エレベーター」の様に「百人一首」に乗れるといふ途方もないシロモノもあるが、大抵は自働電話位のもんだ。其中で知った同志が「バッタリ」と来ることは往々にしてあるんだから世の中は面黒い。月末に洋服屋と一緒にゐるのゐども頗る妙であらう。親友某女極拡張せる愛妻と共にゐる一日、銀座松屋のエレベーター中にて旧知の藝者に咫尺の間に相見え、ハッと驚く其途端、悲しや女房第六感の探知する所とあり、訊問深更二時に及んで尚果てず。鶏鳴のこうほひ漸くゆるされた有名な事件がある。結婚せんとする諸君よ、エレベーターに乗る時は、充分注意をすべきである。

（浩一郎）

北海道便り

社用で羊蹄山麓へ来て居る。羊蹄山は　赤富士と言はれる山、頂上が廣いが形はそっくりだ。此の地方は積雪期登山不可能と言はれて居る。反って先鞭をつけてくれる事を希望してゐる。

誰か来ないか。これに対してニセコアン・バイスホーン等真白な山が聳えて居る。木一本無い、スキーには持って来いと云ふ山だ。

北海道へ来てから家庭に不幸続きの為にどちらへも欠礼して居る。高木の言ふ極楽トンボなどはふくふったよ。

（三月一日　ゲレンデ）

田舎宿の祝儀

甲「安かったぜ、昨夜の泊りは！一人二円にならないんだからね。あんまり安かったから女の子ーそら、ひな絵な女の子が二人居たらう？あれに一円づつやってきたんだよ」

乙「何時やったんだい？」

甲「出がけにさ、朝やっちゃや悪いのかい？」

乙「うん、別に悪かないけれど、昨夜でふくてよかった」

丙「君の云ふことは反対じゃないか、田舎ぢや祝儀を宿へついたら、すぐやらないといけないんだよ。田舎者は血のめぐりが悪いからね」

甲「血のめぐりは確かに悪いよ、今朝だって、モ

ヂモヂして却々受取らぬかったぜ」
乙「それが問題ぶんだよ、だから昨夜でぶくてよかったといふんだよ」
甲「どうもわからねえぶ、昨夜やったらどうしたってんだい？」
乙「君は知らないんだね、田舎宿の前夜の祝儀といふ風習を！」
甲「馬鹿にするぶ、いくら田舎は物が安いったって！、一円で来る奴があるもんか」
乙「五十銭以上にぶると来るんだよ。僕の友達が、田舎の宿で女中に壱円やったんだ、勿論、着くと直ぐにね、女中がきまり悪さうな顔をして容易に受取らぶいんさうだ、純真ぶものだと感心しぶがら云ったもんだ。
「少いけれどとっといてくれ給へ、僕の心持だから」
女中は一円と友達の顔を七三に見較べぶがら、到々受取った。さて、草木も寝る忍満時、顔に當る夜風にフト眼をさませば、二三尺開いた桃元の障子の間から覗いてゐる女の顔！　友達はメメを押えて夜の明けるまで床の中でふるえて居たんださうだ。わかったかい？　だから君のは朝でよかったといってるんだよ」
甲「アハ……八人も一緒に泊ってそんぶ馬鹿ぶことが出来るかい」

空は紺碧に晴れ渡り一片の雲もない。満山燃ゆる様ぶ紅葉。行手の空に眞一文字に引かれたスカイラインは目指す荒船の台地。晩秋の朗かぶ朝まだき山峡の径で拾った物語である。（七兵衛）

大阪辯

最近ニュウースが無いから手帳に書きつけた京阪神の言葉を知らせる、順序は目茶苦茶だ。

わやにする（馬鹿にする）
いふしった（行ってしまった）
でんずう（余計）
関東だき（おでん）
たく（煮る事）
むかつく（癪にさはる）
じっくん（小遣りでゴロくしてる事ペンちゃんの如し）
えげつない（ひどい、嫌ぶ）
みぞれ（氷水）
いかき（ぶる）
かうて来る（買って来る）
かって来る（借りて来る）
じょろくむ（あぐらかく）
小方業（雲有置業）
おむし（味噌）
うち（自分の事、男も使ふ）

おま　（ありま す）
でこ　（人形）土佐では燒芋の事を云ふ　胴だ
たまであかん　（てんで駄目だ）
できうす　（かんそどき）

（終）

二月例會

板き打ち鈴の道ちやんのお目出度に攻撃？
いや美望で彼の一人舞台だった。流石に近ちやんでもこれて居つた何処とはともしにそはしてゐた。鬼かカクランか。

三月例會

例會は試験直後の十四日と定めて置いたが、森竹ぶつチン君急に洋行する事になつたので例會はその送別會と一緒　出発を祝すのやら脱線を戒しめる會かわからない様だつた。

消息

森竹五郎　一ケ年の豫定で三月二十二日朝東京取発洋行の途に上る。先づ船で佛國に行き欧洲を見物来年は米國に渡る予定。

渡邊九郎　四月三日結婚式

近藤恒雄　四月九日結婚式

松木謙三　四月一日結婚式

一月には要ちやんが早くも結婚の式を挙げ、四月はくつわを並べて三組の式が挙げられる事とおつた。ついては先例に依り一々御祝をする事はお互に懐具合も知りきつて居る仲の事故今際お祝は遠慮して貰ふ事に四人で申し合せをしましたからその様に御取計ひ願ひ度御座います、旅にパンフレットの隅を借りて御願申して置きます。

（四人）

（終）